

スマホの画面に浮かぶ「00:12」が、やけに無機質に光って見えた。喉の奥から重たい息がこぼれる。静まり返った社内では、その音さえ妙に大きい。誤魔化すように小さく咳払いをすると、少し離れた席からギィ、とオフィスチェアの軋む音がした。

「日付、変わりましたね」

少し離れた席から声が飛ぶ。振り向けば、センターパートの黒髪をかき上げながら、五十嵐くんがこちらを見ていた。彼の瞳を見つめてしまうと、きゆう、と下腹部が切なげに疼く。わたしはそれに気づかないフリをし、彼から目を逸らした。

「どうします?」

問われたのは主語のない言葉。

今から大急ぎで支度をして会社を出たとしても、終電に間に合う確率は低いだろう。速まる脈を無視して「……お邪魔します」と小さく口にする。五十嵐はまるでその言葉を待っていたように、嬉しさを隠しもせず「わかりました」と笑いながら返事をした。

きっかけは〇ヶ月ほど前のこと。残業で終電を逃したある夜、五十嵐くんから「家、来ます？」と何気ない調子で言われたのが始まりだった。もちろん最初は遠慮した。わたしは彼の恋人でもない、同じチームではあるがただの同期だ。お邪魔していいはずない、と。けれど彼から返ってきた言葉は、誘惑そのものだった。恋人はいないこと、会社から歩いて十分もかからないこと、近くにコンビニがあることを淡々と並べられ、疲れ切っていたわたしの頭と体は、その誘いに抗うことができず頷いてしまったのだ。

そうして週に〇、〇回ほどある残業の日は、彼の家に立ち寄ることがルーティンとなっていた。



五十嵐くんの家にお邪魔するようになってから数度目の夜。ネクタイを外し首元のボタンを外した彼と、ショーツだけを身につけたわたし。なぜか彼のベッドの上で向かい合っていた。抱きしめられれば、すっぽりと覆い隠されるだろう。男らしい体格の彼を目の前にしても、わたしは怖いとは思えなかった。

どうしてそうなったのか、今でもよくわからない。ただ、恋人でもない男性の家へ頻繁に行く時点で今更か、自分の身体がお礼になるほどの魅力はないが彼が求めるのなら渡してしまおう、という気持ちがあった。そしてなにより、普段の彼らしい冷静な様子はなく、あまりにも切ない声で乞うように囁くのだ。その声に押されるようにして、わたしは彼の言葉に導かれてしまった。

「君に触れたい」

その言葉通り、五十嵐くんの大きな手が肌へ伸びた。強張るわたしの身体を溶かすように、彼の手のひらが皮膚を撫でる。一部分しか触れ合っていないのに、体温がひとつになろうな感覚。大人しく身を任せると、嬉しそうに彼は笑った。ゆっくりと彼の指先がわたしの胸をなぞり、乳輪と肌の境をくるくると辿る。焦らすような指の動き。ぞくぞくと背筋が痺れるような気持ちよさが走り、下腹部がきゅうつと蠢くのを感じた。逃すように吐いた息がやけに熱い。

わたしの姿に満足したのか、五十嵐くんは期待するようにピンと張った乳頭を爪の先で引っかき始めた。あ、あ、と我慢できず甘ったるい声が漏れる。乳首は今まで見たことが

ないほど硬くしこっている。ぴんぴんと弾かれるのを、わたしは体を震わせながら受け入れるしかなかった。

「ここ弱いんですね……カリカリしてるだけなのに、真っ赤になってビンビンになってる」

「っ……あ、しらない……ふ、あっ♡ あんまりさわんないし……は、っんッ♡」

「へえ、もったいない。……じゃこれからたくさん気持ちよおくし行きますから、覚えていきましようね」

途端、弾くだけだった五十嵐くんの指が、きゅっ、きゅっ、と絞るように乳首を挟みだした。耳元で彼の低い声が響く。なにやら不穏なことをつぶやいているが、それを咎める余裕などなかった。先っぽが引っ張られ、胸の形が変わる。電流のような感覚が背筋を走り、彼の指に縋るようにして背中を反らせてしまう。

「あっ……、う、あっ……っ♡ のばさ、ないで……ん、んんッ♡」

ぎゅつと強く摘まれ、そのままグニグニと感触を楽しむように指に力が加わる。チラリと見た自分の乳首は、戻らないのではないかと思うほど形を変えていた。乳輪は盛り上がり、乳頭は見たことがないほど大きくなっている。恥ずかしさか、興奮か、多分どちらもだろう。目の前が滲むみながらも、ショーツが湿る感触があった。

「……痛い？」

泣いてるわたしに気がついたのか、五十嵐くんが気遣うような仕草で私の目元を撫でた。痛いわけじゃない。それを伝えるために首をゆるりと横に振る。

「五十嵐くんに、こんな姿を見られてるのが……は、ずかしくて……わたし、こんな……」
「……恥ずかしいだけですか？ 嫌、とかではない？」

「いやなんかじゃない、けど。なんで、こんなことしてるんだろうとは思ってる……」

そうだ。流されてしまっているが、わたしはなぜ、五十嵐くんに気持ちよくされているのだろう。その疑問をぶつけると、彼は吐息だけで小さく笑った。涙を拭われ、視界がはっ

きりとしだす。彼の瞳は強い熱を宿しながら、壊れ物に触れるようにわたしを捉えていた。

「——どうしてだと思います？」

彼は形のいいその唇で、甘い声を乗せ囁いた。彼の纏う空気に酔わされ、わたしは息を呑むしかない。

はく、と口を動かすことしかできず、言葉を紡がないわたしを見ると、彼はどこか満足気に笑みを深める。まるで初めから答えなんて求めていないかのよう。

頭が真っ白になり焦りつつも、どこかぼんやりとしていると、乳首にぬるりとしたものが当てられた。ハッと胸元を見れば、指を離れた彼が乳首を口に含んでいる。

「や、なん……っあっ、んっ♡ あっ……ああっ♡」

れろ、れりゅ、と五十嵐くんの舌が唾液を刷り込むようにして乳首に絡みつく。乳輪から乳首の先端めがけ舌先がなぞり上げ、そのままピン、と弾かれた。指とは全く違う刺激にゾクゾクと腰が栗立つ。のぼせたような、それでいて灼けるような熱を身体は欲してい

くのがわかった。口から出るのは熱っぽく、言葉にならない音ばかりだ。浅ましいその欲を抑えるように、ぎゅっと目を閉じ、身体を震わせる。

「っ!?!? あ、あ……っ!♡」

跳ねる腰を押さえるように片腕が回され、身動きが取れなくなると同時に、乳首に軽い痛みが走った。思わずそこを見れば、どろりとした瞳と視線が合う。五十嵐くんの瞳に見つめられ、きゅう、とお腹の奥が切なげに疼いた。そのまま、五十嵐くんは見せつけるように再度乳首に歯を立てると、チロチロと舌先が乳頭を弾き出す。

背筋に軽い震えが走り、へこ、と腰が揺れる。どうしようもなく燦る快感をどうにか逃したくて無意識に動いてしまったが、まるでその先を誘うような行動だったと自覚し、顔に熱が広がっていく。泣きそうなわたしを見たとして、五十嵐くんの指や舌は止まるはずもない。飴を舐めるようにコロコロと乳首を転がされ、もう反対側の乳首はつまみを弄るように指でクニクニ、コリコリと刺激される。交代するように反対側を舐め、唾液に濡れた乳首を指先で弄る。もうどのくらい触られているかわからない。時間の感覚がなくなるほど、じつくりと弄られ続けていた。身体のかなかに溜まっていく快感を吐き出すように声が

出ていく。

「あっ……んうっ！♡ うう、あっ、まって……おっ、おかし、い！ へんなのくる……っ！
やだ、あっ、~~~~ッ！！♡」

溜まっていた何かが湧き上がっていく。表面張力で保っていた水面が決壊するような感覚。自分じゃどうしようもできない、初めて感じる身体の異常。なにかに縋っていたくて、胸元から離れない五十嵐くんを抱きしめてしまった。すると両方の乳首にギュウウ、とあまりにも強い刺激が走る。乳頭に彼の歯が食い込み、そのままぐう、と口で伸ばされ、もう片方の乳首も乳頭が軽く潰すように指で引っ張られる。

痛い、痛いはずなのに、あまりにも強烈な快感。思わず身体が仰け反り、胸元を彼に押し付けるような体勢になってしまう。カクカク、と腰が揺れる。身体を貫くような、初めての感覚に震えが止まらない。

「あ……、あ、あ……っ♡ ひ、う……♡ あっ……はっ……♡」

「……もしかして乳首でイきました？」

五十嵐くんがなにか喋っているが、音として拾うだけだ。口の端からよだれが垂れているが、それを拭うことすらできない。荒くなった息遣いを必死で整える。そんなわたしを邪魔するかのように、彼の爪先がカリカリと両方の乳首を引っ掻き続けていた。ぬるま湯にひたるような気持ちよさが終わることなくぐるぐると身体の中を巡る。

「ふ、あ……、も、やめ……は、んっ♡ あ……♡」

「かあわい……」

熱に浮かされたように、どこか甘ったるく掠れた声だ。そろりと覗き見た彼の瞳は、艶を帯びて揺れていた。

「俺に弄られてアクメしたんですね……ああ、かわいいな……」

普段のしつかりとした様子は鳴りを潜め、初めて見る彼の様子に脈拍が速くなる。頬をわずかに上気させ、そしてどこか切羽詰まったように息を吐いている。彼はわたしを抱き

しめるとベッドへと押し倒した。そうして、乳首の快感を徹底的に教え込むように、彼はどこか高揚とした様子でわたしを追い込んでいったのだった。



「なに考えてるんですか」

「は、あ……っん、うなに、も……んッ♡ ……っ♡」

初めて五十嵐くんに触れたことをぼんやりと思い出していると、どこか咎めるような声が刺さった。あなたのことだ、なんて言えるわけもなくゆるりと首を振る。

服を脱がされ、部屋の空気にさらされた肌がふるりと戦慄く。初めての時と同じで、彼はわたしとは正反対で肌を見せてはいなかった。仰向けに沈んだ身体は、まっさらなシーツに縫いつられたように動けない。なにせ五十嵐くんが重しのように伸び掛かり、大きな手でわたしの両手首を頭上で拘束するように絡め取っているからだ。彼はわたしの胸に顔を寄せて、ちゅう、ちゅぽと乳首を舐め続けていた。鼻にかかった甘ったるい声が自分の喉から出ることが恥ずかしく、顔が火照る。唇を嚙むわたしを彼はいたずらっ子のように

目を歪ませ見つめてくる。

「声、我慢しなくていいのに」

「はっ……しなきゃ、でしょ……ふ、う……っあ♡ ゆびで、いじらないで……んう♡」

「これ、好きですよ。あなたのこと、気持ちよくしたいからやめません」

自分の乳首がこんなにも敏感になったのは、絶対に彼のせいだ。「上手に気持ちよくなれてますよ」「全部俺のせいにしていいですから」なんて優しく囁かれ、甘やかされてしまえば、彼に身を預ける他なかった。社会人になってからというもの、性欲を自覚することも少なくなっていた。眠っていたそれを彼は意図も簡単に目覚めさせたのだ。

乳首から口を離れた彼は、唾液でぬるつくわたしの乳輪を人差し指と中指の付け根で挟み支えると、親指でピンピン、と乳頭を弾き出した。弾かれるたびに、じわじわと乳首から身体全体へと快感が広がっていく。もう何度も受けてる刺激なのに、わたしの身体は慣れることなく、その快感に震えるしかなかった。

五十嵐くんは乳首を弄られるだけで、わたしの身体は簡単に絶頂へと向かう。触られすぎて敏感になってしまったのか、最近ではブラジャーを着けるとときやシャワーを浴びると

きなど、日常動作のかすってしまった刺激でさえ感じてしまうのだ。

シワが寄るようにシーツを握り込む。ゾワゾワと背筋に駆け上がってくる快感に、いまだ慣れない絶頂の予感。ぎゅっと目を閉じ、甘ったるい気持ちよさに浸ろうと腰がヘコヘコとみっともなく揺れる。息が上がり、声も我慢できない。

「あっ……♡ あっあっ、んっ……ふ、だめ、も……いっちや♡ は、あっイくイく、イ……ッ♡」

「だあめ」

「んお……っ！♡」

五十嵐くんの指が乳首から離れる。絶頂間近まで追い詰められたわたしの乳首は真っ赤に充血し、上下する胸に合わせてぶるぶると震えていた。

「は……あ、なん、で……」

「今日はまず、こちらでイってもらおうと思って」

布越しに染みる愛液で自身の指が濡れることも気にせず、五十嵐くんはクロッチ部分を指でなぞる。軽く押し込むようにして指が動かされ、下腹の奥が期待するようにじわりと熱くなった。ぬちゅ、ぬちゅ、と湿った音が静かな部屋に響く。耳の先まで熱くなるのがいやでもわかる。身を隠すようにして縮こまろうとするが、五十嵐くんがそれを許すはずもなかった。

「あ……っ、ん……♡」

わたしのショーツに手をかけると「腰、あげれますか」と五十嵐くんが問いかけた。拒否することもできず、応えるように腰を浮かせば、するりとショーツを抜き取られる。それをあやとりのように指で広げると、濡れたクロッチ部分をわたしへと見せつけた。

「乳首だけでこんなに濡らしたんですか？ ……すけべな人だ」

「っ！ い、五十嵐くんのせいでしょ……！」

「ふふ、そうですね……俺のせいだ」

「あ、……っ、んっ、んう……っ♡」

五十嵐くんはシャツが濡れるのも気にせず、体液で重くなったショーツを置いた。ぬるつくわたしの秘部に中指をゆっくりと挿しこんでいく。ぬちゅぬちゅ、と膣ヒダを掻き分けるように進み、指の根元までナカに埋める。指一本だけなのに、わたしの身体はそれを求めていたように、ギュウウ……っと締めつけてしまう。

ここ最近の五十嵐くんは乳首だけじゃなく秘部にも触れ、一緒に愛撫することを気に入っていた。節だった男らしい指はナカを探るように、拡げるように動く。最初は圧迫感で少し苦しく感じていたソコも、今では三本くらいなら簡単に飲み込むようになってしまった。

「俺に乳首を弄られてイきそうになって、お漏らししたみたいにパンツを濡らしたんですもんね……腰へコへコして乳首アクメ期待して、寸止めされちゃってかわいそうに。ねばねばの真っ白な本気汁まで出してしまつて……」

「やだ、ふっ、ん……あっ、あっ……う、いわないでっ♡ は、ん、あ、あっ♡」